

心理職における知識のメタモデルとしての 情動的構成主義

松 本 宏 明

要約

心理職における知識のメタモデルとして、情動的構成主義を提示した。情動的構成主義の基礎となる情動的な世界観とは、客観的な伝達モデルではなく、情報を物質に担われたパターンと捉える意味生成的な情報観である。この情報観の原理的説明を通じて、対人援助場面を「情報による意味生成過程とその困難に関する場面」と捉え直し、多職種連携や多領域において重なりを見出す公認心理師の知識モデルとしての可能性についても検討した。

キーワード：情動的構成主義 入れ子 意味 公認心理師 メタモデル

1. 情動的構成主義提示の背景

1-1. 心理職に求められる「何でも屋と専門性」との両立

本論では、対人援助職としての心理職の知識を記述しうるメタモデルとして情動的構成主義を提示する。そもそもなぜ「知識のメタモデル」なのか。

臨床心理学領域の特異性とは、「心」の「問題」という二重の不可視な存在にかかわるため、学問領域としての心理学と、社会構築的営為としての臨床実践とが重なり合うことにある。このような不可視性は、介入法の選択基準となる心的機能が理論内部で先取りされるという、臨床心理学がはらんできた循環的性格の一因と考えられる。この状況を評して、精神科医で思想家でもある Ciompi(1982)は、早くから「ここらについての多くの学問領域が、「ケーキ」という全体のなかから自分たちの方法で手に入れることのできるおいしいところだけを取り出している」と危惧していた。

本邦での臨床心理学領域の特徴として、1990年代以降の急速な発展を担ってきた認定資格としての臨床心理士が、個人心理療法中心の心理職像を方向づけ、また、国家資格化の方向性にも影響を与えてきた(丸山, 2018)ことがあげられる。しかし本邦では心理職も、2011年の東日本大震災、2017年の公認心理師の国家資格化、2021年現在の世界的な新型コロナウイルス感染症の流行と、僅か10年間で

社会情勢を含め、大きな変動を経験している。近年では、分断されている学派と臨床心理をメタな視点から見直す作業が必要さも指摘されるようになってきた(東畑, 2017)。

加えて現代社会では、地球規模における相互依存の成立や進化(正村, 2009)としてのグローバリゼーション、さらにはグローバル化とローカル化の相互依存的な進行「グローカル化」が著しい。このグローカル化した社会では、公認心理師や臨床心理士のような、専門職的な知が優勢となる。これら各専門職間は、職域確保のために自らの社会的意義や機能をいわば競い合う関係にある。また、各専門職にとって専門知識とは、Abbott(1988)の専門職論を紹介する丸山(2007)を参照すると、専門職と仕事とが結びつくことによる排他的な管轄権の獲得の要件となる。つまり専門知識とは、専門職にとってアイデンティティを決定し、専門職の「質」となり、専門職間の競争に打ち勝つ手段(Abbott, 1988)なのである。

グローカル化は、「心」の「問題」という二重の不可視な存在を扱う心理職にも無縁ではない。それどころか、領域横断的となった心理職の立ち位置は、「グローカル化」のいわば写し鏡ともいえる。Neimeyer et al. (2014)が、7～9年程度で約半分近い心理学の専門知識が古くなってしまふ、と心理職の知識の耐久性の低下を指摘したように、情報化社会においては心理職も、反省的(リフレキシビリティ)実践家(能智, 2011)であることが求められるようになった。特に公認心理師では、多職種教育がカリキュラムとして盛り込まれ(丸山, 2018)、「多職種協働、地域ケアのためには何でも屋でなければいけないが、専門性との調和をどうするかが大きな作業(第1回公認心理師カリキュラム等研究会での佐藤忠彦の発言)」とされる。すなわち心理職には、「心」の「問題」についての「何でも屋と専門性」とを両立しうる知識の準拠枠組みが求められている。だからこそ、「知識のメタモデル」を提示するのである。

1-2. 「モノ」と「コト」とを分断しない知識のメタモデルの必要性

冒頭で指摘した、臨床心理学の各モデルの循環的性格とその帰結としての共通言語の不在への問題解決は、主に1990年代以降、臨床心理学の統合や折衷といった試み(平木, 2003; 村瀬, 2008など)に託されてきた。これら統合や折衷の試みの多くの前提には、「サイエンス(科学性・客観性)とアート(直観性・主観性)の統合(平木, 2003)」とされるような、「実証と実践」「客観と主観」という二元論的な認識論が横たわっている。一方、グローカル化した現代社会では、近代西欧社会で当然視されてきた「客観と主観」、すなわち「モノ」と「コト」とを

二項対立的に捉える認識が相対化されうる。したがって、西欧的な主客二元論を内面化しようと試行錯誤を続けてきた本邦の心理職においても、二元論的な認識論とは異なる反省的な視座が選択肢として浮上する。

また、多職種連携が重視される公認心理師教育では、精神科医 Engel (1980) が提唱した生物心理社会モデルが準拠枠として定着しつつある。折衷モデルとされる生物心理社会モデルは、心理職にとって援助 / 連携モデルの一翼を担う自らの立ち位置を指し示す。しかし、中前 (2010) が臨床家は自分がしたいと思うことならなんでもしてしまう、と生物心理社会モデルの難点を指摘するように、心理職にとっても心理側面をどう捉えるかの境界は、結局は、個々の心理療法モデルで異なってしまう。とはいえ、心理職も統合的な援助の意義を少なくとも知識としては内面化している現在、生物心理社会という布置を踏まえたモデルの必要性自体は疑いない。

とりわけ公認心理師は多領域の横断資格であることから、狭義の心理学とは異なる枠組みから知識に言及する領域横断的なメタモデルが、専門職としての公認心理師の新たな指針や意味づけにも寄与する可能性がある。本論では、その切り口として、情報を意味生成的に捉える正村 (2000; 2008) の情動的な世界観に基づき、対人援助、特に心理職において「モノ」と「コト」とを分断しない知識のメタモデルという観点から、松本 (2011) で提示した情動的構成主義の原理的性格と対人援助領域での可能性について検討する。

1-3. 理論的背景としての家族療法と社会情報学

情動的構成主義の背景として、臨床心理学領域では、情報理論を背景のひとつとする家族療法との関連が深い。家族療法の特徴は、システム論や情報理論、物語論などの認識論の影響を受け発展してきた社会構成的な性格にある。特に、コミュニケーション派家族療法は、Bateson (1972) による「力と衝撃の世界から情報の世界へ」という認識論的転換を背景に、情報を「(受け手にとって) 差異を生む差異 (Bateson, 1972) (括弧内筆者)」と定義し、情報概念を家族間コミュニケーションを捉える鍵概念と位置づけてきた。

一方、社会情報学の領域では、家族療法と直接には無関係ながら、科学技術の進展に伴う現代の情報社会化に対応して、従来の情報観そのものを捉えなおす試みが現れつつある (正村, 2000; 西垣, 2004など)。このうち本論では、情報過程における意味生成に着目する正村の写像アプローチに依拠する。この写像アプローチでも、Bateson が、差異的アプローチの情報観の背景として挙げられてい

る。

つまり、対人援助領域のメタモデルとしての情報の構成主義は、情報の意味側面に着目する家族療法の流れを継承しつつ、理論的基盤としては、社会情報学の情報的世界観に依拠する [Fig.1]。すなわち、起点を臨床心理領域に置きつつも、社会情報学の情報観を取り入れることで、対人援助領域における臨床心理領域の位置づけを逆照射する意図がある。本論では、その理論的基盤として、正村が提示する情報の世界観に焦点をあてる。

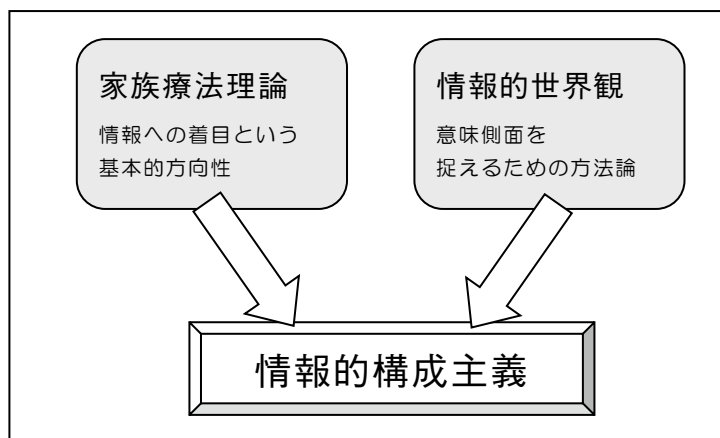


Fig.1 情報の構成主義の位置づけ

2. 情報の構成主義の概観

2-1. 現代社会での情報と人間との関係性の変容

一般に、情報は「出来事の知らせ」と捉えられている。そして情報概念は、その一般的な位置づけとしては、伝達される対象として客観側面が比較的強調されてきた。この一般的な情報観は、Shannon の情報モデルに基礎づけられている。Shannon モデルの特徴とは、①人間は情報の送信者と受信者②情報を内容不問の小包（ブラックボックス）③情報は、計測可能な時間と均一的な空間で扱われる、という点にある。この Shannon モデルの情報観は、松本（2015）で検討したように、認知療法など臨床心理学領域でも援用され、主客分離の前提のもと客観側面から情報を捉える情報観の定着に寄与してきた。

しかし、情報化社会とされる現代社会では、私たちと情報との関係が著しく変

容している。仮想・拡張現実をはじめ情報技術の革新は著しく、近代社会でわれわれが当然視してきた、直線的時間や均質空間の唯一性や、身体を境界に外界と内界が峻別される主客図式への疑義が避けえない社会となった。現在では、遺伝情報やデジタル情報といった多様な次元の情報が、臨床場面で扱われる人生の意味にまで、深く入り込んでいる。すなわち情報化社会とは、既存の主客分離の情報観から想起されるような、人間が情報に囲まれた社会ではない。身体的存在である人間の情報性と意味との結びつきとが、対人援助場面を含め、多様な形態で顕在化する社会と捉えられる。

この状況が、情報の意味的側面を扱う対人領域のメタモデル、という情報的構成主義の方向性を準備する。情報的構成主義が依拠する正村（2000；2008）の情報的世界観では、情報について、主客分離を前提とした伝達モデルから「かたち（パターン）による、かたち（パターン）の変換（正村，2008）」という写像アプローチへという情報観そのものの転換がなされる。この写像アプローチは、原理的で難解ではあるが、情報の意味生成的側面に焦点をあてるその特徴が、対人援助場면을捉える鍵となりうるので、正村（2000；2008）に沿って説明を加えていく。

2-2. オリジナルかつコピー生成としての写像アプローチ

既存の情報観を正村（2000）は、伝達される対象のコピーか、あるいは違いを生むオリジナルの生成なのか、という側面から整理している。Shannonモデルは、情報のコピー（同一性）側面に焦点化しているが、正村は、コピー現象を時空間の移動という側面も含め検討すると、「オリジナルに対する差異を一切含まないコピーというのは、そもそも存在しない（正村，2000）」とし、コピー現象を、同一的かつ差別的な関係の生成として捉え直した。

正村の情報的世界観においては、この同一的かつ差別的な関係性の確立が、写像作用と位置づけられている。一般に写像とは、ある集合Aの各要素が終集合Bへと対応づけられたときのAからBへの対応 f 、とされる。関数や方程式も、写像の一例とされる。正村が示す例では、数式 $1+2=3$ における左辺の $1+2$ と右辺の 3 は同一の数的概念だが、構成する数字に差異がある。すなわち、数式という写像 f において、AとBとの間に同一的かつ差別的な関係が確立されている。

正村は、紙媒体でのコピー生成を、写像作用の例として示している。いわゆる複写機では、①オリジナルのデータのデジタル変換②紙媒体へと再変換／出力、という意味で、二重の変換が遂行されている。この出力されたコピーは、オリジ

ナルとは異なる時間・空間的位置を占める。さらにデジタル変換では、情報がオリジナルのアナログデータから選択的に取り込まれ、また、出力に際し拡大／縮小などの処理が付加されうる。つまり、内容的な変化も生じうる。すなわち写像アプローチでは、情報作用が時間・空間・内容的次元における二重の変換により、オリジナルとの間に同一的かつ差異的な関係を確立する写像作用と位置づけられており、コピー現象そのものが捉え直されている。正村（2000）は情報を、次のように定義している。

時間的・空間的・内容的な次元で写像作用を遂行する二重の変換の
媒介項

このように写像アプローチでは、情報を伝達作用ではなく、二重の変換の媒介項（例では複写機）が果たす写像作用として捉えている。情報的構成主義では、この正村の情報的世界観に基づき、オリジナルとコピーとの間に確立される同一的かつ差異的な関係、すなわちオリジナルでもあり、かつコピーでもある関係性に焦点をあてる。

2-3. 情報の三次元—「時間」「空間」「内容」—

写像アプローチにおいて、情報作用は、「時間」「空間」、そして「内容」という三つの次元で遂行されている。各次元で確立される同一的かつ差異的な情報作用を、正村に沿ってそれぞれ見てみよう。

「時間写像」とは、人間の記憶作用や、データの記録化など、情報の「保存（貯蔵）」の働きである。記憶や記録に際し、その前後において同一のパターンが時間的に移動し、異なる時間的位置を占める。つまり、時間的側面で、パターン間に同一的かつ差異的な関係が確立されている。「空間写像」とは、ニュースや報告といった情報の「伝達」の働きである。ニュースや報告に際し、伝達元から伝達先へと同一のパターンが空間的に移動し、異なる空間的位置を占める。つまり、空間的側面で、パターン間には同一的かつ差異的な関係が確立されている。これら「時間写像」「空間写像」とは、個人内での記録等の時間作用と、個人間の情報伝達作用という二つの既存の情報作用を、ともに写像作用として捉え直したものである。

一方、パターンの内容間の変換としての「内容写像」では、変換過程において情報内容の変更や修正がなされる。この内容写像は、人間と深くかかわる意味生

成作用を果たしうる、写像アプローチ独自の視点と位置づけられている。このように写像アプローチでは、情報の働きを、「時間」「空間」「内容」の3次元からなされる媒介項が果たす差異を含む同一性生成、すなわち写像作用と捉える。この情報観の転換の意義は、既存の情報観が扱えなかった意味側面を捉える道筋を照らし出すことにある。

2-4. 「非意味的情報」と「意味的情報」との共通性と差異

「意味」について、一般に私たちは、言語表現と対応する意味にまずは一定の客観性を想定し、その上で個人の主観やコンテクスト側面を加味しているように思われる。例えば「バカ」の辞書の意味は相手への罵倒だが、カップルで眺める夜景というコンテクストでは、「甘い愛のささやき」にも意味づけられうる。つまり情報同様、意味についても、われわれは辞書的な客観の意味と主観の意味を対置する二元論枠組みを、暗黙裡に前提としている。

一方、意味については、各心理療法モデルでも、例えば精神分析的な「症状の意味」、実存主義的な「人生の意味」、認知行動療法や短期家族療法での「意味づけ」といった、各モデルごとの観点を持っている。これら各モデルにおける意味の捉え方は、各モデルが保持してきた「心」や「問題」に関する認識とも深く関わってきた。

加えて対人援助職としての心理職は、各モデルと切り離して、ひとりの人間として「援助がクライアント（患者）にどんな意味があるのか」「自分の心理職としての意味とは何か」と、思い悩まずにはいられない。つまり、意味を各モデルで回収する主客図式とは異なる統一的な枠組みは、多職種連携時代の心理職にとって、自らの意味づけやキャリア形成の指針としても、有用な可能性がある。

情動的な世界観に基づく情動的構成主義では、臨床心理領域ではどちらかといえば各モデルに回収されてきた意味が、情報作用により生成されるパターンと捉えられる。ただ、すべての情報が意味を生成しうるわけではない。正村（2000）は、情報を、デジタル情報や遺伝情報、神経伝達物質などの「非意味的情報」と、知覚情報や言語情報などの「意味的情報」とに分類している [Fig.2]。この分類について、正村の説明に沿って見ていこう。

両者はともに情報の定義に基づき時間・空間・内容という3次元での写像を遂行するが、「非意味的情報」とは、この3次元の写像が一体化した〈一対一〉写像である。遺伝情報が例となる。DNA から RNA への遺伝コードの転写や、DNA の自己複製における情報作用では、時間・空間・内容という3次元が一体

化し遂行される。しかし、時間的／空間的移動がそれぞれ、あるいは一体としてなされただけでは、意味は生じない。意味生成の契機となるのが、内容的変化である。例えば遺伝情報の突然変異は内容的変化に相当する。ただ、遺伝情報の場合、時間・空間・内容という3次元の写像が一体化しており、時空写像の遂行を観察する、いいかえると意味を見出す観察者視点を設定しえない。したがって、非意味的信息である。紙媒体のコピー現象も、たとえばコピーによる画質劣化への気づきのように、意味を見出す観察者を複写機とはまた別に想定しない限り、非意味的信息である。

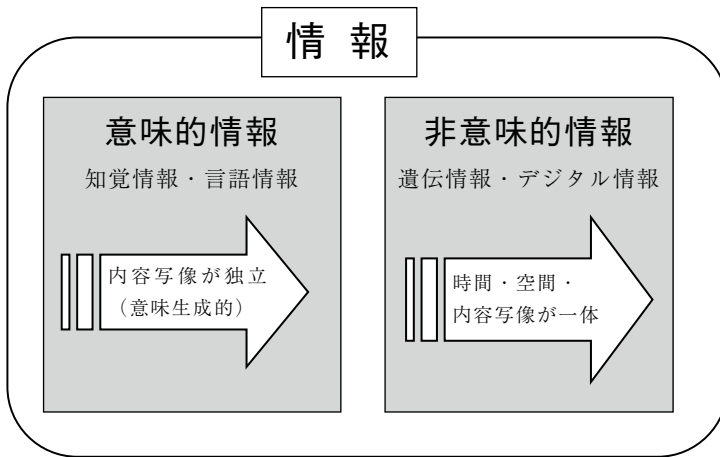


Fig.2 意味的信息と非意味的信息
(正村 (2000) をもとに筆者が作成)

一方、知覚情報や言語情報など「意味的信息」の場合、「非意味的信息」とは異なり、内容写像が時間写像と空間写像の拘束を離れている。具体的には、時空写像の遂行を観察する、いいかえると意味を見出す観察者によって、時空を超えたパターンとしての意味が見出されうる。意味とは、図式的には (パターン B_1) に位置しており、さまざまな出来事や経験 (対象) が、「いま」「ここ」 (パターン A_1) でも、別の「あのとき」「あそこ」 (パターン $A_{2,3,\dots,n}$) でも生じることを見出す観察者の内容写像 (パターン I_1) により、見出される脱時空的なパターンである [Fig.3]。それぞれ時空に拘束されていた〈多〉のパターンが、〈多対一〉 (一対一) という二重の変換により時空から解放されることで、〈一〉のパターンとしての意味が見出される。換言すると意味とは、観察者が「いま」「ここ」と「あ

のとき「あそこ」との間の重なりを見出すことによって見出されるパターンである。

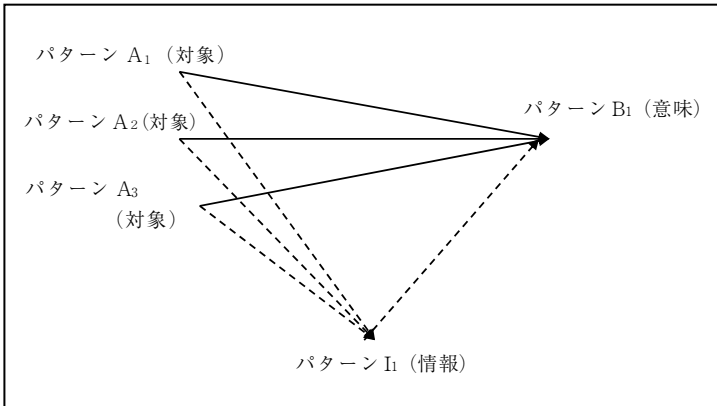


Fig.3 意味的情報における内容写像の概念図 (正村, 2000)

2-5. 脱時空性パターンとしての意味

検討してきたように、情報的世界観では、意味とは、「いま」「ここ」から解き放たれた、すなわち脱時空的なパターンと捉えられていた。さらに正村 (2000) は、この脱時空的な程度 (脱時空性) を、情報の種類によって差異づけ整理している。脱時空性の低い意味的情報が知覚的 (非記号的) 情報であり、脱時空性の高い意味的情報が、言語 (記号的) 情報である。

知覚的情報の例として、目の前に置かれた「イス」は視点移動により、様々に見え (対象) を変化させる。しかしこの見え (対象) は、もともと座面や脚、背もたれから構成される「イス」そのものの形態 (情報) に拘束されている。つまり、対象と情報とが分かち難い。このように知覚的情報の場合、同一的かつ差異的な関係性の確立としての情報が果たす変換の恣意性が低いため、見出される「意味」つまり「イス」 (情報) が提供する「座る」というアフォーダンス (意味) は、相対的に客観性を帯びる。つまり知覚的情報の場合、対象と情報と意味とが不可分である (Fig.4の左位置)。この知覚的情報の構造を、可変項 (対象) からの不変項 (情報) 検出によりアフォーダンス (意味) を見出す情報抽出理論として定式化したのが、Gibson (1979) の生態学的心理学である。

一方言語的情報の場合、知覚的情報とは異なり、対象と情報と意味との三項間に直接的関連がない。例えば「リンゴ」という言語情報が指す対象は、球状の赤

く甘い果実だろう。しかし、元ビートルズの控えめなドラマーを指す可能性も、否定できない。すると、同じ「リンゴ好き」という言語情報においても、受け手によって、見出される意味内容や、意味が導く受け手の行為は異なる可能性がある。つまり言語情報の場合、対象と情報（記号）および意味との変換恣意性が極大化している。言語情報において意味とは、特定の時間や空間に拘束されない、脱時空的パターンとして見出される（Fig4の右位置）。

2-6. 意味の連続的な脱時空性

情報的世界観において意味とは、情報作用を観察する観察者視点の設定により、出来事や経験から見出される脱時空的なパターンと位置づけられていた。この観察者視点は、意味的情報と内容・時間・空間が切り離しえない非意味的情報との分水嶺であり、対人援助領域における情報の構成主義の導入意義でもある。例えば、DNAの突然変異そのものは非意味的情報である。しかし、DNA転写について、理念的観察者としての人間の語りは、内容写像が時空写像から分離している言語（意味的）情報である。このとき恐らくは、生命の神秘という「意味」、つまり時間や空間を乗り越えた脱時空的なパターンが見出されている。

知覚的情報や言語情報といったそれぞれの意味的情報の間の関係を図式的に示すものとして正村（2000）が提示するのが、対象－情報（記号）－意味という、3つのパターン間の相関を示す「意味方程式（正村，2000）」である [Fig4]。この意味方程式は、対象と情報との変換恣意性が、意味の程度（脱時空性）と対応する情報の構造を表現しており、3つの各パターン間の距離が等しい正三角形として図示されている。例えば知覚的情報の場合、対象と情報との変換恣意性が小さく、見出される意味の脱時空性が低い。このとき意味方程式は、最小の三角形となる。一方言語的情報の場合、対象と情報との変換恣意性が極大化しており、意味の脱時空性が高い。このとき意味方程式は、最大の三角形となる。

とりわけ対人援助領域において、この意味の脱時空性という枠組みを重要と考える理由は、脱時空性という意味についての捉え方が、これまで既存モデルも拘束されてきた知覚（物質側面）と言語（意味側面）との二分法を超えた連続性を内包しているからである。この連続性を示す手がかりとして、正村（2000）では、三項関係から記号の動的側面に着目するPierce（1931）の記号論が参照される。Pierceは知覚的情報や言語情報（シンボル）以外の記号のパリエーションとして、対象との因果的關係を示すインデックス（指標記号）や、類似的關係を示すアイコン（類似記号）を提示する。

いわゆる非言語コミュニケーション、例えば援助者のうなずきは、クライアント等の観察者にとって、インデックスとして機能している。つまり、援助者は、クライアントに共感していると推論される（それ以外の可能性も排除できないが）。また、クライアントが描く家族画やバウムテストは、心理職等の観察者にとって、アイコン的な機能をもつ記号と考えられる。すなわち、家族画やバウムテストは、それぞれ家族関係や、個人のパーソナリティーとの類似性を示しているが、家族やパーソナリティーそのものではない。

つまり、これらインデックスやアイコンにおける対象と情報との結びつきは、言語情報ほど恣意的ではない。とはいえ、知覚情報ほどには直接的でもない。両者のいわば中間的存在ともいえるこれら記号情報は、知覚情報と言語情報との二分法にとどまらない、対人援助ともかかわる意味の連続的な脱時空性を示唆する。

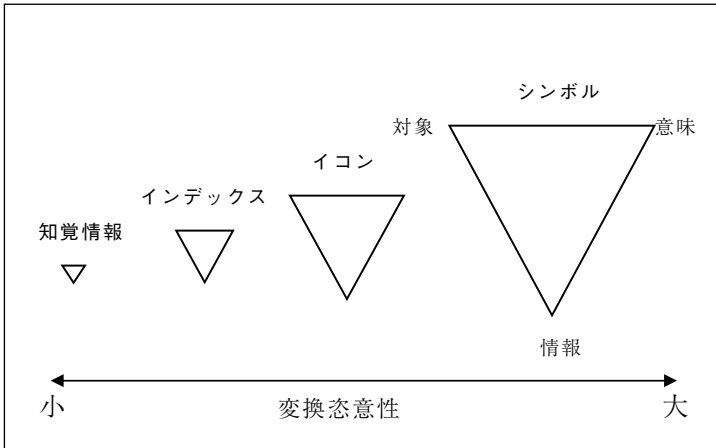


Fig.4 意味方程式における対象と記号（情報）との変換恣意性
（正村（2000）を参考に、筆者が作成）

2-7. 意味を規定する個体内情報空間と社会的情報空間

検討してきたように、意味の情報においては、意味生成における対象と情報との変換恣意性が、情報を分類する基準と位置づけられている。しかし、この枠組みがかりに個人に限定された場合、脱時空性が低い知覚的情報は客観的、一方で脱時空性が高い言語情報は主観的、ということとなる。しかし、情動的構成主義は、外界刺激の知覚（客観）とより高次の脳の情報処理による概念化（主観）とを対置する二元論的な意味決定論ではない。意味的情報のなかでも脱時空性の高

い言語情報は、受け手によって能動的に解釈されうる余地を内包している。

例えば、教師から2人の子どもが、それぞれ「しっかりしなさい」と言われた場面を考えてみる。内容的には同一の言語情報だが、そこで見出される意味としては、幼少期に近親者から肯定的ストロークを受け育った子どもには「激励」、一方、苛烈な被虐待体験を持つ子どもには「叱責」と、それぞれ差異づけられる可能性がある。すなわち、2人が受けてきた体験の蓄積の差異が、受け手それぞれに異なるパターンを生成しうる。

とくに対人援助領域では、この情報の受け手の能動的理解側面に対応したメタモデルが求められる。そこで情報的世界観を援用する情報的構成主義では、意味を個人内、そして主観側面から徹底して解き放つことで、2人の子どもの意味内容を差異づける。情報的世界観において個人と社会の関係は、それぞれパターンとしての情報を情報的境界として構成される意味生成的な情報空間と捉えられる(正村, 2008)。情報空間は、個人をはじめ主体によって「一個の主体を立ち上げる主観の世界(正村, 2008)」として意味が見出される個体内情報空間と、社会的コミュニケーションを通じて構成される社会的情報空間とに分類されている。

正村は、個体内情報空間を、物理的境界、つまり身体そのものとは異なる認識の境界と位置づけている。このとき、われわれの内部と外部は、身体という物理的境界により隔てられている。一方で、内部と外部とは、情報の時空写像の遂行により、差異を維持しつつ同一化されうる。したがって物理的境界が越境され、「物理的には自己の外部にある存在すべてが個体内情報空間の内部に属する(正村, 2008)」。一方、社会的情報空間とは、この個体内情報空間としての人間による意味の情報である言語コミュニケーションをつうじて生成される、家族・組織・国家などが該当する。

両者の関係として、社会的情報空間は、言語コミュニケーションを展開する個体内情報空間なくして成立しえない。とはいえ、われわれが個体内情報空間において脱時空の意味を見出しうるのは、社会的情報空間において、言語コミュニケーションが運用されているからである。このように現実世界の情報空間内/間においては、さきに紹介した理念的な3項モデルを超えて、情報作用は連鎖的に遂行されている。すなわち、対象も、対象を写像し意味を見出す情報も、それぞれが先行する情報過程による刻印を受けつつ成立している。

このように個体内/社会的情報空間が、互いに包含されあう情報的世界観では、意味が個体に閉じない。意味は関係性において見出され、その意味によりまた関係性が構成される。

2-8. 個人と社会との「入れ子」の様相

この個体内情報空間と社会的情報空間とは、「入れ子」の関係、より正確を期すと、「パターンとしての入れ子（正村，2008）」の関係にある。「入れ子」とは、マトリョーシカ人形のような同型物の組み入れだが、この「入れ子」を物理的枠組みを超え敷衍すると、部分の中に全体が組み入れられる事態と捉えられる。個体内情報空間と社会的情報空間とは、互いが互いの部分かつ全体をなす、相互的な「入れ子」関係にあるとされている。

個体内情報空間は、家族に限らず、学校、会社、国家など無数の社会的情報空間との入れ子関係にある。宗教などもその一つである。例えばサン・ピエトロの大聖堂は、人間以外の動物には、知覚的情報として、雨宿りや日除けのアフォーダンス（意味）を提供するに過ぎない。しかし、キリスト教に馴染みのない日本人でも、実際に内部に身を置けば身が引き締まるような感覚と荘厳な気持ちを味わうだろう。このとき人間は、「大聖堂」という言語情報以上の、そして単なる雨宿りや日除けといった知覚的情報とも異なる脱時空の意味を見出しうる。つまり、宗教という社会的情報空間でのコミュニケーションにより構成された大聖堂との「入れ子」関係により、脱時空的な意味を見出す拘束のもとにあるからである。見出されない場合に課される社会的サンクション（制裁）がその証左である。

言語的存在である人間は、個体内情報空間と社会的情報空間との、「入れ子」関係に重層的かつ連鎖的に拘束されている。この入れ子の拘束のあらわれと捉えうる臨床場面は、心理面接やアセスメントの構造、多職種連携、地域連携も含め、その例にいとまがない。また、個人と宗教との関係が写すように、個体内情報空間と社会的情報空間間の関係の様相は、時代背景や社会様式とも、切り離しえない。

とくに正村（2008）は、現代社会の特徴として、近代社会の「主観／客観」の二元論的世界観によりいったん影をひそめたこの入れ子関係が、情報化とネットワーク化を背景に再び主題化された、と指摘する。なぜ情動的構成主義では執拗なまでに「入れ子」を焦点化するのか。その理由は、心理職をはじめ、援助職が依拠する主客分離の既存モデルも意図せざる拘束を受けてきた「入れ子」の関係を、改めて解きほぐし整理する作業が、現代社会の心理職にとって、多職種間での連携のありようや、既存の「生物-心理-社会」といった枠組みを改めて記述する視点の手がかりとなりうるからである。

3. 対人援助のメタモデルとしての情動的構成主義

3-1. 「意味生成過程の困難とその解消」という方向性

情動的の世界観を基礎とする情動的構成主義の特徴は、次の3点である。第1に、情報の定義である。物質に担われたパターンとしての情報は、時間・空間・内容という3次元で同一的かつ差異的な関係を確立する写像作用を担っていた。第2に、情報における意味の位置づけである。意味は、物質の拘束を離れた脱時空的パターンとして、連続的に捉えられた。第3に、個人と社会との入れ子関係である。情動的境界として構成される情報空間の枠組みは、個人と社会との関係を、「どちらか一方が他方に存在論的に先立つわけではない（正村，2008）」入れ子関係として捉えた。

情動的の世界観は、物質と意味との連続的枠組みとしての情報一元論と位置づけられていた。人間とは、身体という物質に担われた時空拘束的存在だが、同時に脱時空的な言語コミュニケーションにより構成される社会的情報空間との「入れ子」関係の拘束のもと、身体知覚を超えた脱時空的意味を見出しうるのだった。

そして、情動的の世界観に基づく対人援助のメタモデルとしての情動的構成主義の方向性も、この情報空間間の「入れ子」関係が照らし出す。すなわち、いわゆる「心」の「問題」が、個々の情報空間の観点からみた入れ子の重層的かつ累積的なプロセスの帰結として捉えうる。さきに述べたように人間とは、社会的情報空間との「入れ子」において身体知覚を超えた脱時空的意味へと拓かれている。しかし、一方ではこの「入れ子」の拘束を受けるがゆえに、それぞれの個体内情報空間の単位においては、意味を見出しえない事態、すなわち「心」の「問題」をも経験しうるのではないだろうか。さらに対人援助とは、この意味を見出せない事態の解消とかかわる営為と位置づけられるものではないか。

このように、情動的構成主義においては、対人援助における「問題」と「援助」とを、「入れ子」に拘束された援助対象者の個体内情報空間において生じる「意味生成過程の困難とその解消」という観点から捉えようと試みるのである。

3-2. 社会的情報空間として家族を捉える臨床的意義

社会的情報空間は、家族、学校、職場や病院などの組織、SNSなどメディア空間まで多様である。なかでも、情動的構成主義が主題化してきた情報の分類からは、家族の特徴が重要である。なぜなら家族とは、遺伝・生殖・養護・摂食、居住といった非意味的・知覚的情報が織りなす過去から現在、そして未来を写し

出す連鎖的情報過程が、色濃く刻印された情報空間と考えられるからである。つまり、社会的情報空間としての家族の特徴とは、脱時空性が低い知覚的情報と、脱時空性が高い言語の意味とが、分かちがたいことが特徴と考えられる。

また、「入れ子」の論理からみると、個体内情報空間としての子どもとは、家族という社会的情報空間の部分である。一方、子ども自身の認識としてある個体内情報空間において、社会的情報空間としての家族とは、自らを全体とする部分でもある。私たち人間とは、この家族というパターンとの同一的かつ差異的な「入れ子」関係において相互拘束され、不可避的に意味を見出すコンテクストに置かれている存在といえる。例えば、母親の拒絶のしぐさ（インデックスに相当）と、相反する言動（言語情報）の繰り返しが、入院中の青年を再発作へと追いやった Bateson, et al.(1956) の二重拘束的状況は、情動的構成主義の観点からすると、青年の個体内情報空間において、その部分としての家族という社会的情報空間との「入れ子」において、意味を見出さざるを得ない拘束である。二重拘束状況において青年は、言語情報が効力を持ちえないなか、家族関係に関する脱時空の意味を見出すべくコンテクストに拘束されていた。

このように、いわゆる臨床的問題の多くは、家族との「入れ子」における意味生成過程での困難性として捉えられようように思われる。夫の足音に身をすくめる DV 被害者の妻。あるいは母の不機嫌な声だけで、「夕食抜き」を悟るネグレクト児童。これらの例が示唆するのは、家族との入れ子関係において個体内情報空間が脱時空の意味を見出す際、言語が直接の媒介たりえない場合に生じる「もつれ」から脱出すべく試みの切ない悪循環と、その帰結たる病理の諸相である。

家族を例としたが、もちろん、全体としての個体内情報空間は、家族以外の学校や組織など多様な社会的情報空間を部分とし、一方、社会的情報空間にとっては自らが部分となる多様な入れ子の関係にある。情動的構成主義では、このように臨床的な問題を、重層的かつ累積的な入れ子構造における意味にまつわる困難として理解しようと試みるのである。

3-3. 情動的構成主義は心理職や支援をどう捉えるのか

「知識のメタモデル」としての情動的構成主義は、心理職や支援をどう捉えるのか。とりわけ各専門職が機能分化した現代社会においては、連携に際しても、例えば医師が生物学 / 医学、心理職が（臨床）心理学、ソーシャルワーカーが社会（福祉）学といった、各専門領域の基盤の異質性側面が強調される傾向にある。しかし管見の限り、チーム医療が求められる医療領域でも、Ciompi が「ケーキ」

の比喩で示したようなこころの恣意的な切り取り、専門職間の職域争い、あるいは各専門性の内実として、中前が言う何でもありの現状も残存しているように思われる。現在多職種連携で生じている困難には、異質性側面の強調の弊害と思われるものが少なくない。このような事態は、情動的構成主義の観点からは、各専門職がこころの問題を主客分離の個別モデルの枠組みから折衷的に捉えることで、援助者や被援助者にとって一義的な脱時空的意味を見出しえない困難事態、と考えられる。

一方、情動的構成主義において人間とは、①情動的存在②個体と社会との入れ子関係の拘束、③脱時空的パターンとして意味を見出そうとする、という情報空間の枠組みから捉えられた。この生物心理社会の各次元を一元的に捉えうる情報の分類は、各援助職間を差異づけつつ重なりを写し出す、つまり同一的かつ差異的な関係性を見出す手がかりとなる。例えば医師は、主に非意味的情報や知覚情報といった、相対的に脱時空性が低い情報を扱う。ソーシャルワーカーは、主に社会制度や資源等、社会情報空間で意味が見出されている言語的情報を主に扱う。心理職も主に言語的情報を扱うが、ソーシャルワーカーと比べて、その対象は、インデックスやアイコン的なものも含め、主に個体内情報空間での情報となるだろう。このように情報の分類によっては、各援助職間の差異が情報という共通言語を用いて写し出される可能性がある。すなわち支援方向性としては、例えば心理療法だけではなく、社会的制度の活用や、医師の薬理作用の説明も言語情報であり、広義の心理的支援と意味づけられうる。つまり、従来は各専門職固有とされてきた各領域が、互いが互いの外部かつ内部という入れ子の論理から相対化されうる。

付言すると、援助者が、各専門職間においてすでにある重なり合いに気づき否定しないこと自体、松本（2017）においてオープンダイアログの「不確かさに耐えること」との関連でも述べてきたような、ひとつの専門性と考えられる。とりわけ、インデックスやアイコン的な多義的な言語情報を扱う心理職には、このような重なりを見出す役割があるように思われる。この脱時空的意味の重なりを見出す専門性とは、物心二元論の批判から提示される「科学と日常との重ね書き（中村、2013）」として、自然や日常といった多様な情報と切り離して存在し得ない専門性でもあるように思われる。

特に公認心理師は、資格としての誕生過程において、生まれながらに、「何でも屋でありつつ専門性との調和」において意味を見出すという葛藤を抱えていたのだった。公認心理師資格を社会的情報空間になぞらえると、多領域で、他職種

と、クライアントと、それぞれの関係性における入れ子的な重なりにおいて意味を見出すという専門性が、すでに胚胎している情報空間において展開される資格なのかもしれない。この入れ子的な重なりに意味を見出す具体的方法論の一例としては、児童虐待における多職種連携や、児童相談所の福祉職と心理職との役割交換といった実践から展開されている（上松・吉村，2019）各機関や各職種が一歩ずつ踏み出す「のりしろ型の支援や連携」の焦点化があるように思われる。

4. 結論と課題

情動的構成主義を、「心」の「問題」について、自らの営為を反省的に位置づける心理職の知識のメタモデルと位置づけ検討してきた。情動的構成主義は、情報から想起されるモノ的イメージとは異なり、重なりの中で意味を見出すという、援助者の広義での人間的な側面がより前景化するモデルであった。その導入意図は、心理職や対人援助職をとりまく「モノ」と「コト」との客観／主観図式を包含し、情報空間間を写像作用、すなわち「かたち」でつなぎ、重なりを見出す「入れ子」の論理の獲得にあった。

メタモデルとしての情動的構成主義について、本論の到達点は、主客モデルを超えて重なりを記述する観点の獲得意義を提示することまでであった。この観点が心理職にとって実際有用たりうるかどうかは、本論で原理的に検討してきた「情報」や「意味」といった概念についての対人援助領域におけるさらなる精緻化にかかってくる。例えば意味については、例えば Gibson (1979) がいう生物に危険をもたらすマイナスのアフォーダンスへの拡張、また、写像モデルについては、セラピストが面接室で果たす「うつす（移す・映す・写す）」役割に焦点をあてる（森岡，2005）ような既存モデルとの接点が生み出される方向性となるように思われる。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費18K02096, 19K03321の助成を受けたものです。

文献

Abbott, A. (1988). *The system of professions: An essay on the division of expert labor*. University of Chicago Press.

- Bateson, G., Jackson, D.D., Haley, J., & Weakland, J. (1956). Toward a Theory of Schizophrenia, *Behavioral Science*, 1, 251-264.
- Bateson, G. (1972). *Steps to an Ecology of Mind*. Ballantine Books. 佐藤良明 (訳) (1999). 精神の生態学. 新思索社.
- Ciampi, L. Affektlogik. *Über die Struktur der Psyche und ihre Entwicklung. EM Beitrag zur Schizophrenieforschung. Klett-Cotta, Stuttgart.* (1982). (松本雅彦・井上有史・菅原圭悟 (訳) (1994) 感情論理. 学樹書院.)
- Engel, G.L. (1980). The clinical application of the biopsychosocial model. *Am J Psychiatry*, 137, 535-544.
- Gibson, J.J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin Company. (古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬晃 (共訳) (1985). 生態学的視覚論. サイエンス社.)
- 平木典子. (2003). 統合的家族療法への道～関係(家族)療法中心の統合の試み. 家族心理学年報, 21, 123-139.
- 厚生労働省 (2017) 公認心理師カリキュラム等検討会議事録 https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-syougai_380707.html (2021年1月6日).
- 丸山和昭. (2007). Andrew Abbottの専門職論：一カウンセラーを中心に一 社会学年報, 37, 71-81.
- 丸山和昭. (2018). 多職種連携教育はいかにして国家資格カリキュラムに組み込まれたか：公認心理師カリキュラム等検討会の議事録分析名古屋高等教育研究, 18, 281-301.
- 正村俊之. (2000). 情報空間論. 勁草書房.
- 正村俊之. (2008). グローバル社会と情報的世界観—現代社会の構造変容. 東京大学出版会.
- 正村俊之. (2009). グローバリゼーション—現代はいかなる時代なのか. 有斐閣.
- 松本宏明. (2011). 「家族の意味」を写すメタ理論としての情報の構成主義. 東北大学大学院教育学研究科博士論文 (未公開).
- 松本宏明. (2015). 臨床心理学における情報処理モデルの受容とその課題. 志學館大学人間関係学部紀要, 36, 65-84.
- 松本宏明. (2017). オープンダイアログが照らし出す臨床心理学の専門性：「不確かさに耐えること」をベイトソンの学習Ⅲとして捉える試み. 志學館大学人間関係学部研究紀要, 38, 13-30.
- 森岡正芳. (2005). うつし 臨床の詩学. みすず書房.
- 村瀬嘉代子. (2008). コラボレーションとしての心理的援助 臨床心理学, 8(2), 179-185.
- 中前貴. (2010). 精神医学における生物・心理・社会モデルの今後の展望について 精神神経学雑誌, 112(2), 171-174.
- 中村桂子. (2013). 科学者が人間であること. 岩波新書.
- Neimeyer, G.J., Taylor, J.M., Rozensky, R.H., & Cox, D.R. (2014). The diminishing durability of knowledge in professional psychology: A second look at specializations. *Profession-*

- al Psychology: *Research and Practice*, 45, 92-98.
- 西垣通. (2004). 基礎情報学 生命から社会へ. NTT 出版.
- 能智正博. (2011). 臨床心理学をまなぶ6 質的研究法. 東京大学出版会.
- Pierce, C.S. (1931). *Collected Papers of Charles Sandas Pierce*, Vol. 1-8; Charles Hartshorne and Paul Weiss eds. The Belknap Press of Harvard University Press. (内田種臣 (編訳) (1986). パース著作集2 記号学. 勁草書房.
- 東畑開人. (2017). 日本のありふれた心理療法—ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学. 誠信書房.
- 上松幸一・吉村拓美. (2019). 児童相談所臨床心理技術者の役割変更に伴うアイデンティティの変化. 心理社会的支援研究, 10, 37-53.